

もう一度、愛しき人達と

ユータボウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

曹孟徳を支え、大陸に平和をもたらす一翼を担った北郷一刀は、その後元の世界に帰還した。それから十年。成長し、警察官となった一刀だが、暴走するトラックよりある親子を庇い、命を落としてしまう。

——もう一度、皆に会いたかったなあ

そんな願いと共に目を閉じた彼が再び意識を取り戻すと、そこには

――

目次

プロローグ	1
帰還①	5
帰還②	9
帰還③	18
陳留郡①	22
陳留郡②	27
陳留郡③	33
陳留郡④	37
陳留郡⑤	41
ある夜のこと	45
再会①	50
来訪の報せ	54

## プロローグ

目が覚めて最初に感じたことは、”帰ってきたんだ”という実感だった。

視界に映る天井は病院のそれだろうか。少し顔を動かせば窓ガラスが、その外には道路や車、家々などが見える。そのどれもが俺にとって当たり前のもので、かつ俺がいたあの世界にはなかったものだ。

それから次に押し寄せてきたのは、寂しさと悲しき。

俺の愛した、何よりも大切な人達と、もう二度と会うことは出来ないかもしれない。そんなことを考えた途端に、涙が止まらなくなってしまうた。

「ううっ……ぐずっ……華琳っ……皆っ……!」

病院と思わしき場所でベットに横たわりながら、俺——北郷一刀は、嗚咽を噛み殺しつつ静かに泣いた。

▽△▽△

俺が魏の皆を想って泣いたのは、今振り返ってもその一回だけだった。

泣いてなんかいられない。うじうじしている暇などない。

今の俺を華琳が、皆が見たらなんと言うだろうか。いつまでそうしているの、あなたは一体何をしているのかしら、なんて、そんな事を言うに違いない。そう考えるとこんな情けない様を晒している場合ではないと思ひ知ったのだ。

色んなことを一生懸命やった。それは剣道部での活動であったり、学校での勉強だったり、地域で行われるボランティアであったり。時間を無為にはしないよう、とにかく色々なことに手を出してみた。

上手くいかなかったり、失敗したことも数え切れなくらいあった。けれど、その度に反省をして、次はどうするべきかをしっかり考えるようにした。失敗を失敗したまま置いておくような真似は、絶対

にははいけないと分かっていた。

——華琳、俺はちゃんとやれているかな？ 少しは前に進めているかな？

返事がないことは分かっている。それでも時々、俺は澄み切った蒼穹にそんなことを尋ねた。

やがて俺は聖フランチェスカ学園や大学を卒業し、いつしか一端の社会人となっていた。選んだ仕事は、警察官。魏では警備隊長を勤めていた経験もあるし、俺自身も単純な企業よりも交番など、人々の生活に近いところで働きたいと思っていたので、これ以上適任な職業もないだろう。

尤も、警察官という仕事自体、俺が想像していたより遥かに大変なものだった。警察学校での日々は訓練と勉強漬けで、卒業して交番の勤務になってからも、帰宅すると同時にベッドに倒れ、泥のように眠ることも多々あった。また勤務時間が長いのは承知の上であるし、給料も悪くないのだが、人々の安全を守る職業だけあって有事の際は休日でもする必要がある。とにかくまとまった休みがなかなか出来ないのだ。

それでもまとまった時間が出来れば漢文や中国語を勉強したり、乗馬のクラブに通ったりもした。あの魏で必死になって身に付けたものを無駄にはしたくなかったから。

街の人々の生活を見守り、窃盗などの犯罪者を取り締まる。決して楽な日々ではなかったが、それでも誰かのためにと思えば頑張ることが出来た。

そんな日々を過ごしているうちに……気付けばあれから、十年もの時が流れていた。

「ん……いい気分だ、ほんと」

暖かな陽気に照らされ、俺はポツリとそんなことを呟く。天気の良い非番の日は、こうして適当に散歩をするのが習慣になっていた。もう見慣れた道や風景でも、今と仕事でパトロールをしている時とは、また違った風に見える。

気の向くままに、行く宛もなくブラブラと散歩を続ける。時折顔見

知りの人とすれ違えば挨拶を交わし、時には少し立ち話をするこもあつた。それは地元の小学校に通う少年であつたり、買い物帰りの奥さんや、杖をついたお爺さんであつたりする。こうした何気ない人とのふれ合いが、俺は好きだ。

「ふう……もうお昼時か」

休憩がてら立ち寄つた公園、そこで俺は自動販売機で買った缶コーヒーを片手にベンチへ腰掛けた。少し離れたところにある遊具では子供達が元気に遊んでいる。その様子に微笑ましきを感じつつ、ゆつくりとコーヒーに口をつけた。

「華琳、春蘭、秋蘭、華侖、柳琳、栄華、桂花、季衣、流琉、凧、真桜、沙和、霞、風、稟、香風、燈、喜雨、傾、瑞姫、天和、地和、人和……皆、元気にしてるかな……？」

雲一つない綺麗な青空を眺めつつ、俺は大切な人達の顔を思い出す。あれから十年もの年月が流れ、あの頃の記憶も少なからず薄れてしまった。いつ誰の買い物に付き合つただとか、誰と何を食べたとか。仕方ないと割り切るべきこととはいえ、皆と過ごした記憶が少しずつ薄れ、なくなっていくのはとても悲しいことだ。

だが彼女達の笑顔と声だけは、十年経つた今でも鮮明に思い出せる。

それだけは、絶対に忘れはしない。

「……会いたいなあ、もう一度」

笑顔も声も覚えている。けれど、やはり会いたい。お互いにちゃんとかい合つて、触れ合つてその熱を感じたい。俺の名前を呼んでほしい。

これはきつと叶わない夢だ。俺の物語は華琳を勝利させたあの瞬間に終わったのである。あの世界に戻ることは、残念だがもう出来ないだろう。俺は一人、この世界で生きていくしかない。

「——ああ、分かつてるよ。悩んでる暇があるなら、やれることをやるべきだよな」

ぐつと缶コーヒーを傾けてその中身を一気に煽り、立ち上がる。もうお昼時で腹も空いてきた。どこかで適当に飯を食って、もう少しブ

ラブラしてから家に帰ることにしよう。家に帰ったところで誰も待っていないのだ、ゆつくりしていたって誰にも文句は言われない。

北郷一刀、もうじき三十路になるのを控えたアラサーであるにも関わらず、未だに独身を貫き通している。理由は語るまでもないだろう。

この身は余すところなく華琳と曹魏に捧げると誓ったのだ。例えもうあそこには戻れず、皆に会うこともないのだとしても。

「ははっ……まるで春蘭みたいなきことを言ってるな、俺」

流石に彼女ほど一途に尽くせるかと問われれば分からないが、俺にとって華琳と曹魏は己の命より大切なものだ。それだけは間違いない。皆を守るためならどんな困難にだって立ち向かってみせると、胸を張って断言出来る。

「やっぱり、俺は皆が大好きなんだなあ……」

十年、まだ三十にもなっていない俺にとって、その時間は人生の三分の一に相当する。それだけの時間を経て尚、俺は未だに華琳達を想い続けている訳である。あらためて言えば結構な重症だ。きつとこれは死んでも治らない、不治の病に違いない。

ぼんやりとそんなことを考え、意味もなく妙な誇らしさを抱きながら、俺はまだ元気な子供達の声の残る公園を後にした。

## 帰還①

その存在に気付いた時、反射的に体が動いていた。

いつもと変わらないパトロールになる筈だった。あらかじめ定められていたルートを通り、不審者や事故が起きていないかを見て回る。通りすがりの人達に挨拶をしながら、相方である先輩巡査と「今日も平和だなあ」なんて話をしたりして、それで終わる筈だったのだ。けれど、見てしまった。

数メートル先にある横断歩道。そこで赤ん坊を抱いている女性へ、狙ったかのように突っ込もうとしている一台のトラックを。

「っ！ 危ないっ！」

「ほ、北郷!」

驚きで目を見開いた先輩を置き去りにして、俺は一目散に駆け出した。まるで時間の流れがずっと遅くなったかのような錯覚、周りの景色がスローモーションで後ろに流れていく。

だが、トラックは止まらない。それどころか減速すらしない。相当な速度を維持したまま、真っ直ぐ女性目掛けて突っ込んできている。あんなものに巻き込まれれば命の保証はどこにもない。女性も、その腕に抱かれた赤ん坊も。

そんなことは、絶対にさせない。

「届けっ！ 届いてくれっ！」

全力疾走したままあらん限りの力を振り絞り、右腕を女性へと伸ばす。必死の祈りが通じたのか、その刹那に確かな感触が腕に伝わる。強く突き飛ばされた女性は大きくよろめき、先程の位置から少し離れたところで赤ん坊を守るように背中から倒れ込んだ。

「——良かった」

これで女性と赤ん坊はトラックの進路からギリギリ外れた。あの位置ならトラックに轢かれることはないだろう。

俺はほっと胸を撫で下ろし——次の瞬間にはトラックに撥ねられ、宙を舞っていた。

「……あ」



グシヤリ、と体から生々しい音がした。俺はその音を知っている。同時に視界のほとんどが赤く染まり、全身からありとあらゆる感覚が消え失せていく。

あれは、肉が潰れる音だ。

十年前に経験した戦争であちこちから聞こえてきた、人が死ぬ時の音である。

「!?!」

「!?!」

誰かが何かを言っている。けれど、今の俺にはそれすら分からない。ただ、自分はもうじき死ぬことだけは、この上なくはつきりと理解出来た。

そこに後悔はない。

目の前にあつた二つの尊い命が失われる様を何も出来ないまま見届けるくらいなら、俺が代わりになる方がずっといいと思えた。その気持ちは、こうして瀕死になった今でも変わらない。

あの親子を救えた。

それだけで十分だった。

ただ一つだけ心残りがあるとすれば……華琳の許可なく逝ってしまふことだろうか。

「(華琳……皆……)」

十年前にあの世界で過ごした思い出が、脳裏に次々と浮かんでは消えていく。きつとこれが走馬灯というものなのだろう。それを見た俺は、死の間際だというのに酷く懐かしい気分になった。

「(もう一度、皆に会いたかったなあ……)」

どこまでも広がる、眩しいくらいの蒼穹。

その景色を目に焼き付けたのを最後に、俺の意識はゆっくりと遠ざかっていった。

△▽△△▽

「——に——ちゃ——」

……声が聞こえる。ぼんやりと靄がかかっているように聞こえにくい、恐らくはまだ小さい女の子の声だ。それに引き上げられるように、沈んでいた俺の意識が徐々に覚醒していく。

だが、これはどういうことなのだろう。俺はあの親子を庇ってトラックに轢かれ、死んだ筈だ。あれだけの傷を負って助かる見込みがあると思えるほど、俺は楽観的ではない。つまりここは……天国か？

「おに——ちゃ——兄——ん」

ゆさゆさと体が揺さぶられる。それと同時にさつと柔らかな風が頬を撫でた。

自分が今どんな状況に置かれているのか、気になって仕方がない。俺は生きているのか、それともやはり死んでいて、天国のような場所に招かれているからこそ、こうして思考を張り巡らせることが出来るのか。体の自由が利くようになり、重い瞼を開けようとする、真つ暗だった世界に一筋の光が差し込んだ。その眩しさに思わず「ううっ……」と声が漏れる。

「っ、お兄ちゃんっ！」

先程はよく聞こえなかった声が、今度ははっきりと聞こえた。その瞬間、俺は目をかっと思開き、倒れていた体を勢いよく起こした。その際に額を何かに強打し、生じた鈍い痛みは表情を歪める。

それでも、俺がああ声を聞き間違える筈がない。

ずっとずっと会いたいと思っていた、あの時代に残ってきてしまった大切な人達。その中でも俺を『お兄ちゃん』と呼ぶのは、たった一人しかいない。

「香風……なの、か……っ？」

痛む額を手で押さえながら目を開くと、同じく額を押さえながら涙目になっている少女の姿が映った。薄紫色の髪も、白い首巻きも、水着のような薄手の格好も、近くに転がる大斧も、記憶に残っている彼女と何も変わらない。

「あ……あ……あああ……」

視界が涙で滲む。額の痛みなどすっかり忘れ、俺はよろめきながらも香風に手を伸ばした。何故彼女がいるのだとか、ここは一体どこな

のだとか、そんなことはどうでもいい。ただ今は彼女に触れて、その存在が本物なのかを確かめたかった。

「お兄……ちゃん……」

「ああ……夢じゃないんだ……」

伸ばされた指が香風の頬に辿り着き、その柔らかな肌をそつと撫でる。暖かい。指先から感じる彼女の熱が、彼女が間違ひなくここにいることを、これ以上なく明瞭に伝えていた。その途端に、とうとう俺の目から涙が零れた。

「香風……香風なんだよな……?」

「ぐずつ、うん。シャンは、華琳さまに仕えて、お兄ちゃんと一緒に、空を飛んで……ひつぐ……それで……それで……!」

「ああ……香風……! 香風っ!」

嗚咽を漏らし、香風の小さな体にすがりつく。涙だけでなく、色んな想いが堰を切ったように溢れてきて、俺は声を上げてわんわんと大泣きした。

嬉しかった。

嬉しくて嬉しくて、それ以外のことが出てこない。俺は——否、俺と香風は暫し抱き締め合ったまま、二人揃って嬉し涙を流し続けた。

## 帰還②

一体どれだけの間、泣いていたのか。

ザリツという何者かが地面を踏み締める音に、延々と泣きじやくつていた俺と香風はようやく我に返った。チラリとまだ赤いであろう目で音の方を確認すれば、黄色の頭巾をした三人組がこちらに近付いてきていた。強面の男を筆頭にチビ、デブという個性的な面々の姿に、記憶の遙か奥深くに眠っていた出来事が甦る。

そうだ。あの三人は俺が華琳達の時代にやって来たばかりの頃、混乱していて訳が分からなかった時に出会った連中だ。

この荒野で目が覚めてすぐに香風と出会ったことといい、あの三人組といい、つまり俺は、あの時と同じ状況に置かれているということなのだろうか。

「(トラツクに轢かれて死んだと思ったら生きていて。最初の頃みたいな状況な筈なのに、何故か香風は俺のことを覚えていて、華琳のこととも知っている。何がどうなってるんだろうな……?)」

「おうおうおうおう！ お二方よお、こんなところで随分と楽しそうじゃねえか!？」

「兄貴！ あの男、珍しい格好をしますぜ！」

俺が一人そんな思考を展開する中、ニヤニヤと挑発的な笑みを浮かべた三人組は、大股で俺達に歩み寄ってきた。脅しのつもりか、手にした剣を見せびらかせるように掲げている。

確か最初は、ドラマや映画の撮影か何かだと勘違いしていたんだと思う。だが、今の俺には分かる。太陽の光を反射して光るあの剣は、なまくら鈍とはいえ立派な本物だ。まともに斬られれば当然死ぬし、そうでなくとも怪我をするだろう。

「お兄ちゃん……」

「うん。大丈夫だよ、香風」

心配そうにこちらを見上げる香風の頭を一度撫で、俺はゆつくりと立ち上がる。その際に腰に巻いた帯革をなぞれば、警棒や拳銃といったいざという時に対する武器があることも分かった。今の格好とい

い、どうやら俺はトラックに轢かれた時の状態のまま、この場にいるようだ。相手が剣という凶器を持っている以上、使うかどうかはともかく、こうして何か得物があるのは精神的に心強い。

「お？　なんだ兄ちゃん、命乞いでもしようってか？」

「み、身ぐるみを全部置いていけば、命だけは助けてやるんだな……！」

「命乞いなんてしないよ。ていうか、あんた達こそさっさと逃げた方がいいと思う。じゃないと——」

そう俺が言い終わるより早く、隣にいた香風が斧を持って大きく跳躍する。身の丈よりも巨大な得物を頭上に振り上げ、重力に任せて落下し始めた彼女は、そのまま斧を全力で振り下ろし——結果、地面を真っ二つに叩き割ってしまった。そして、あんぐりと口を開ける三人組に彼女は告げる。

「次は、そっちがこうなる……！」

大斧を構え、鋭い眼光を放つ香風に、三人組の誰かが「ひっ……！」と短く悲鳴を上げる。香風と自分達の実力差を理解したのだろう、彼等は数度アイコンタクトを交わすや否や、一目散にどこかへ逃げていってしまった。その背中がみるみるうちに小さくなっていく。

「……やっぱり香風は凄いなあ」

「えへへ、もっと褒めて」

三人組を追い払ったことで香風は得物を下ろし、笑顔でとてとて俺のところへ帰ってくる。流星は曹魏でも五指に入る猛将だ。十年ぶりにその力を目の当たりにした訳だが、その迫力は微塵も衰えておらず、やはりまだまだ彼女には勝てそうにない。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした？」

「また会えて、嬉しい」

「……ああ。俺もだよ、香風」

香風と目線の高さを合わせ、ふっと笑い合う。しかし彼女はすぐに顔を伏せ、その目に涙を溜めた。

「もう……いなくならない？」

「っ……それは……」

その言葉に、俺は思わず言い淀んでしまう。一体どういう理由でここにいるのか、それは本人である俺にも分からないのだ。これからどうなるのか、そんなことは自分でも予想がつかない。ずっとここに留まっていられるのか、はたまたすぐに消えてしまう可能性も否定出来なかった。

「えっと——」

「香風！ やつと追いついたぞ！」

口を開き、言葉を発そうとしたその瞬間、遮るように俺の背後から声が響く。振り返るとそこには、赤い槍を携えるヒラヒラとした服を着た女性が、やや乱れた呼吸を整えているところだった。その姿には見覚えがあるような気がするのだが、肝心の名前がなかなか出てこない。少なくとも俺がいた時、華琳に仕えていた人ではなかった。

「あ、星」

「全く、いきなり駆け出して何事かと思えば、こんなところで殿方と逢瀬とは。そしてそんな御仁、一体何者だ？」

「あつ、俺は——」

「お兄さん、ですよね……？」

名乗ろうとした刹那、女性の後ろから聞こえた声にビクツと肩が跳ねた。そして、ゆつくりと現れた二人に俺の視線は釘付けになる。

「風、稟……」

「はい」

「お久しぶりです、一刀殿」

渴いた喉から声を絞り出すと二人は——風と稟は優しく微笑んでくれた。もう一度見たいと思っていた愛しい人達の笑顔に、俺はまとも目頭が熱くなるのを感じる。俺はこんなにも涙脆い人間だったのだろうか？

ごしごしと目を擦り、再び顔を上げると、すぐ目の前にさつきまで稟の隣にいた筈の風がいた。彼女はそのままずっと両腕を横に広げ、倒れるように俺へ寄り掛かってきた。ポフンと頭が俺のお腹に当たり、腰にはその手が回される。

「お兄さん」

「……どうした、風？」

「風は……いえ、風だけではありませんね。風も稟ちゃんも、華琳さんも皆も……とつても、とつても寂しかったのですよ」

チクリと、その言葉に胸が痛む。俺がいなくなったことで皆がそんな思いをしていたことに、罪悪感がどっと押し寄せてきた。

「お兄さんがいなくなつて、曹魏の人は変わつてしまいました。それは何も将だけではありません。お兄さんの警備隊に勤めていた兵の皆さんも、その警備隊に守られていた街の人も、皆みくんな悲しい思いをしたんです」

「……ああ」

「……ねえお兄さん、今度は、風達の前からいなくなつたりしませんか？」

それは先程、香風がしたのと同じ問い。俺は上目遣いになりながら僅かに震える風をそつと引き離し、屈んでその肩に手を置いた。彼女の翡翠色の瞳と真つ直ぐ向き合う。

「約束するよ。俺はもう、勝手にいなくなつたりしない。俺は俺の愛した人達と、ずっとずっとここににいるから」

「本当ですか……？」

「本当だよ。こんな状況で嘘なんてつける訳だろ」

風の不安そうに揺れる瞳を見つめつつ、俺はそう断言する。そのまま見つめ合うこと数秒、やがて風は無言のまま、もう一度こちらに体重を預けてきた。小さくて軽く、柔らかい彼女の体を、俺は出来るだけ優しく受け止める。

「信じますよ、お兄さん。もういなくなつたりしたら駄目なんですからね」

「ああ、分かつてる」

そう言つて抱き付いてきた風の背中をそつと撫でると、やがて彼女から「ぐう……」という小さな吐息が聞こえた。それになんともいえない懐かしさを感じ、俺は小さく笑みをこぼす。そして、そんな風を抱いたまま俺はそろりと立ち上がり、今度は稟の方へと歩を進めた。

「稟」

「言いたいことは風が言ってくれましたからね、私からこれ以上貴殿あなたに言うことはありません。ただ……」

「ただ？」

「強いて何かあるとすれば……おかえりなさい、とでも言っておくべきでしょうか」

眼鏡をくいつと上げて微笑と共に言う稟に、俺もつられて笑った。

「うん、ただいま。でも正直、なんでここに戻ってこれたのかはよく分かってないんだけどね」

「分かってない？　ということとは、自力で戻ってきた訳ではなくなんらかの偶然で、ということでしょうか？」

「そうそう。ちよつとした事故に巻き込まれてね」

流星にトラック——稟に分かるように説明するなら、馬より速く走る鉄の塊とでも言うべきか——に撥ねられて死んだと思ったら、とは言わない。これでは現実味があまりに無さすぎて、逆に相手を混乱させるだけだ。本人にもあまり分かっていないのだから、これ以上の説明も出来ないのだし。

「まあ、偶然でもなんでもいいよ。こうして稟や風、香風に会えたんだからさ」

「……変わリませんね、貴殿は。外見は大人なのに、中身はあの頃と全く同じです」

「お兄さんの体、凄く大きくなってますね。ここなんてとっても分厚いのですよ」

「お兄ちゃん、シャンもして」

腕の中でもぞもぞと風が動き、その頬を胸板に擦り付けてくる。相変わらず猫みたいだなあと苦笑した俺は、目をキラキラさせてこちらを見上げる香風を、左腕一本で抱き上げてみせた。体はきつちり鍛えているため、二人くらいの体重なら同時でも特に問題はない。

「むう……」

「おやおや？　風達が羨ましいんですか、稟ちゃん」

「……そうですね。少し羨ましいです」



恥ずかしそうにやや俯きながら、それでも稟は風の言葉を肯定する。すると、「だったら……」と呟いた香風が器用に移動して俺の肩の上に――すなわち、俺が彼女を肩車するような形となった。

「これで、左腕が空いた」

「ふふっ、ありがとうございます香風。一刀殿、お邪魔しても構いませんか？」

「おう、どんと来い」

俺は大きく頷き、左腕で稟を抱き寄せる。柔らかくて、華奢で、少し力を込めれば折れてしまいそうな体だ。目を瞑って耳を澄ませば、三人の鼓動や息遣いも感じることが出来た。

俺の愛した人達が、今ここにいる。

それが嬉しくて、愛しくて堪らない。

「……お楽しみのところ申し訳ないが、少しよろしいかな？」

「ん……あ、ああ。えっと、なんかごめんなさい」

「いえいえ。こちらとしてもなかなか面白いものが見れましたからな。特にあのように素直な稟は随分と珍しい」

そう言ってくつくと笑う女性――香風は星と呼んでいたが、恐らくは真名だろう――に、稟は俺の腕の中で小さく身を竦めた。今のその反応で、目の前の女性がどんな性格なのかが少し分かった気がする。飄々としたからかい上手、といったところか。

「さて、申し遅れました。私は趙雲、字を子龍と申します。以後、お見知り置きを」

「北郷一刀です。北郷が姓で、一刀が名になるのかな。この国の生まれではないので、字も真名ありません。好きなように呼んでください」

「ほう、異国の出身とは珍しい。ふむ……では北郷殿と呼ばせて頂こう。私のことは是非、子龍と」

「ええ。よろしく、子龍殿」

両腕が空いていないため握手は出来ない。そのため、お互いに軽く会釈をして挨拶を済ませた。出来る限り自然な対応を心掛け、内心の動揺は悟られないようにする。

まさかこの女性があつた趙雲だつたとは思わなかつた。だが逆にこの人が趙雲だとすれば、そこにいるだけで感じる強さや空気にも納得がいく。おおよそ分かつた実力だけでも、香風か霞といい勝負が出来るだろう。勿論、俺なんて歯が立つ訳がない。

「さてお兄さん、風達はそろそろ行くのですよ。いつまでもここにいては、怖いお役人さんに捕まつてしまいますので」

「官軍か。もう少し話をしたいところではあつたが……仕方があるまい」

風達の視線の先、遙か彼方にじつと目を凝らせば、もくもくと土煙が立っているのが見える。俺の記憶が確かなら、きつと彼女達なのだろう。

「二刀殿、我々はもう少しこの大陸を見て回ろうと思います。何もかもがかつてのように進むとは限りませんから。昔のことは一旦置いて、いま現在を自分の目で確かめてきます」

「シャンは、お兄ちゃんと一緒にいく」

「そつか。なら風と稟、子龍殿とはお別れだな」

せつかく再会出来たのにすぐ別れてしまうのは寂しいが、彼女達にもやるべきことがあるのだろう。ならば、俺が無理に止める理由はない。俺がこの世界にいる限り、きつとまた会えるだろうから。

「お兄さんお兄さん、お別れの口付けはしてくれないんですか？」

「ごめん風、そんなのがあるなんて初耳なんだけど」

「おいおい兄ちゃん、そこは知らなくても男なら察するところだぜ？」

唇を突き出した風に困惑していると、彼女の頭に乗っている宝篋が呆れたように呟いた。正確には彼女による腹話術での自演なのだが、そこはあえて黙っておく。何か言おうとも風のことだ、適当にはぐらかされるのは目に見えている。

「……そうだな。じゃあ遠慮なく」

頼まれたなら応えてやるのが男の甲斐性だ。俺は屈んで風と高さを合わせると、そつと彼女と口付けを交わした。男女の交わりの最中にするような情熱的なものではなく、鳥が啄むような軽いものである。

元々風とのキスは、躊躇いこそすれど拒否することではない。むしろ望むところですらある。愛しい女性とのキスだ、恥ずかしがる理由などありはしない。

「んふふ、どうもどうも。ほら、次は稟ちゃんですよ？」

「わ、私もやるのですか？」

「当たり前じゃないですか。ほら、早くしないと追い付かれちゃいますよ？」

それとも、と風は一旦言葉を区切った。

「お兄さんとの口付けはしたくない、とか？」

「そんな訳が！……あつ」

うっかり口を滑らせ、顔を真っ赤にしてしまった稟。それを見てニヤニヤとしているのが子龍殿だ。彼女はしきりにこちらへ視線を向けては、「さあいけ」と言わんばかりにくいっと顎を稟の方にやっている。外野なのをいいことに言ってくれるなあと、俺は思わず苦笑してしまう。

とはいえ、このままでは埒が開かないのもまた事実。俺は腹を決めると稟に近付き、その唇に己のものを重ねた。突然のことに稟の動きがピタリと止まり、周りからは「お〜」と感心するような声上がる。

「お兄ちゃん、大胆」

「これは意外ですね。風もびつくりなのですよ」

「ふむ、流されるだけの優男かと思っていましたが……なかなかどうして。この趙子龍、見直しましたぞ」

「煽っておいて随分な言い草だな……。つと、稟、いきなりしちやつてごめん」

「い、いえ……少し驚いただけですの……」

耳の先まで真っ赤になりながら答えた稟だが、こほんと一度咳払いをすると、すっかりいつもの様子に戻っていた。正直、自分の方も結構恥ずかしかったりするので、稟がこうして切り替えてくれたことはありがたい。

「さて、次は私の番ですな」

「残念ですがお兄さんは風達のものなので、星ちゃんにはそう簡単に

はあげられませんね」

「おや、それは残念だ」

……うん、流石に会ったばかりの子龍殿ともやるのは憚られる。ていうか、子龍殿も絶対冗談で言っているに違いない。ああいう性格の人は華琳のところになかったから、油断するとうっかりあちらのペースに巻き込まれてしまいそうだ。

「二人共、行きますよ。このままではいつまで経っても進めません」  
「む、それもそうか。では北郷殿、我々はここらで失礼させて頂く」

「ではではお兄さん、勝手にいなくなつてちやいけませんよ」

「ああ、分かったよ。それじゃあ皆、気を付けて」

「星、稟、風、ばいばい」

「一刀殿、香風、どうか御武運を。華琳さまによろしくお伝えください」

最後に少しずつ言葉を交わし合い、俺達五人は三人と二人に別れて歩き出した。お互いに背を向けて、振り返りはしない。きつとまた会えると信じているのだから。

そして俺達は、これからもう一つの再会を果たす。

誇り高き王、寂しがり屋の女の子と。

「行こうか、香風」

「うん」

右隣を歩く香風と手を繋ぎ、俺は来るべき再会に胸を高鳴らせた。

## 帰還③

ドドドドという馬の足音が大きくなるにつれて、俺の中の感情もどんどんと膨れ上がっていくのを感じる。それは期待であったり、感動であったりと様々だが、それら全てをひつくるめた今の気持ちと述べるなら、『早く会いたい』の一言に尽きる。十年もの間、叶わない夢と目を逸らして蓋をし続けてきた想いは、ここにきてこれ以上ないほどの昂りを見せていた。

だがここで焦るのは厳禁だ。無様な姿はほんの少しでも晒す訳にはいかない。相手はあの華琳であるので、多少取り繕ったところですがに見抜かれるだろうが、それでも男ならこういう時にはきっちり格好をつけたいものなのである。

「お兄ちゃん、緊張してる?」

「そうだなあ……うん、そうかも。嬉しくて堪らない筈なんだけどな」  
手を繋ぐ香風の言葉に苦笑し、一度大きく深呼吸をする。

そして、ついにその瞬間がやって来た。

「北郷おおおおおおおおお!!」

「待て待て待て待て待て!?!」

近付いてくる数にして十ほどの騎馬の一団。そこから最初に飛び出してきたのは、大剣を携えた黒髪の女性だった。怒気を孕んだ表情で叫びながら得物を振り下ろした彼女に、俺は久しぶりと挨拶をする暇もない。勢いよく横に転がってなんとか躲すことが出来たが、切り落とされた髪の毛がはらはらと宙を舞った。

「避けるなっ!」

「おまつ、馬鹿言うな! 死ぬわ!」

「ええい、うるさいうるさい! 貴様は大人しく私に斬られておけばいいのだ!」

滅茶苦茶なことを言いながら再び七星餓狼を構えた女性——春蘭。俺は助けを求めるように彼女の後ろで黙っている主へ視線を向けた。そこで返ってきたのは、思わず見蕩れてしまいそうなほど優しい微笑み。残念ながら助けに期待は出来なさそうだ。

「秋蘭、手を出しては駄目よ。香風、あなたもね」

「御意」

「は〜い」

「ちよつ、華琳さん!？」

「さあ覚悟してもらおうか、北郷！ 華琳さまを散々悲しませた罪、その身を以て償うがいい！」

結果、俺はそれから暫しの間、春蘭と命懸けの鬼ごっこをする羽目になってしまった。迫る刃からみっともなく逃げ回ることおよそ一刻、そこまでしてようやく華琳から制止の声が飛んだ。

「もう満足したかしら。春蘭、剣を納めなさい」

「はっー!」

「はあ……はあ……俺……生きてるな……」

声を出して生存を確認し、すっかり上がってしまった息をゆっくりと整える。激しく地面を転げ回ったせい、青い制服のあちこちは土に汚れて悲惨なことになっている。何度か叩いて払ってみるがあまり意味はなさそうだ。

何より、春蘭に追いかけてられている間は生きた心地がしなかった。我ながらよく頑張って逃げたものだ。あれだけの恐怖を感じたのは果たしていつぶりになるだろうか。曹武の大剣、恐るべしである。

そんなことを考えながら顔を上げると、今度は秋蘭がこちらに近付いてきていた。穏やかで柔らかな笑みを浮かべる今の秋蘭からは、記憶にある凜とした表情の彼女とはまた違った印象を受ける。気付けば、そんな秋蘭に見入っていた。

「久しいな、北郷。息災そうで何よりだ」

「ん……ああ、久しぶり。秋蘭こそ、元気そうで良かったよ」

「無論だ。華琳さまに仕える身として、己の健康には十分に気を遣っているとも」

それより、と秋蘭は言葉を区切り、俺の体をまじまじと見つめた。琥珀にも似た橙色の瞳がすつと細められ、足の爪先から頭頂部までをじっくりと観察される。顔には出さないものの、秋蘭ほどの美人にじつと見つめられてはなかなかにくすぐったいというか、恥ずかし

い。

「あの、秋蘭……？」

「ふむ、やはり以前より逞しくなっているようだな。それに背も伸びている。いやはや、随分と男らしくなったものだよ」

「そ、そつか。まあこれでも一端の警察官……えっと、天の国での警備隊みたいな仕事に就いてたからな。トレーニング……じゃなくて、鍛練もきちんとしてたし」

「ほお……なるほど。ならばその辺りのこともまた詳しく聞かせてほしいものだ。ふふつ、楽しみにしているぞ」

そう言つて微笑した秋蘭は数歩ほど後退り、彼女と入れ替わるように華琳を乗せた馬が現れた。漆黒で大柄の騎馬を操り、太陽を背にして堂々と胸を張った華琳の姿は、俺もよく知る霸王のそれで、俺は無意識のうちに姿勢を正していた。

「久しぶりね、一刀」

「……うん、久しぶり。華琳」

口から出たのは、そんなチープな言葉。言いたいことは他にたくさんなある筈なのに、上手く出てこないのだ。待ち望んだ再会だというのに、これではなんとも締まらない。そうしてまごまごしていると、先に華琳の方から口を開いた。

「いい面構えをしているわ。天に帰つてからも、研鑽は怠らなかつたようね」

「……そうだな。腑抜けた俺を皆が見たらなんて言うかを考えたら、自然と体が動いてたんだよ」

「そう。いい心掛けではなくて」

華琳は俺の返答に満足げに頷くと馬から降り、そのまま立ち尽くす俺のもとにやって来る。そしてふつと笑みを浮かべ——俺の胸にすくと体を預けた。

「……ねえ一刀」

「おう」

「……もう、離さないわよ」

それは今にも消えてしまいそうな、か細い声。俺に抱かれているの

は誇り高き王ではない。一人の、寂しがり屋の女の子だ。

「あなたにはずつと私の隣にいてもらうわ。これは命令よ。もう二度と天の国に帰れるとは思わないことね。もし破ったりすれば——」

「首を刎ねる、か？」

「ええ。よく分かつてるじゃない」

俺の腕からするりと抜け出した華琳は、そう言つて得意げな笑みを浮かべた。それにつられるように、俺もまた小さく笑う。そして、その場に跪いた。

「華琳。こんな俺でいいのなら、もう一度君の傍に置いてほしい。君の覇道を、そしてその先を、今度こそ最後まで見届けさせてくれないか？」

「許すわ！ この曹孟徳の行く末を、あなたには特等席で見せてあげましょう！」

高らかに宣言された華琳の言葉に、俺は再び頭を下げて臣下の礼をとる。直後、その頭をふわりと何かが包み込んだ。優しく、温かい。これはきつと華琳の腕だ。

「おかえりなさい、一刀」

「っ……ただいま……華琳……！」

感極まり、今にも溢れ出しそうな涙をぐつと堪える。だが……駄目だ。数秒も持たずして涙腺は決壊し、俺は大声で号泣しながら華琳の体に抱き付いた。十年もの間に重なった想いが次々と流れ始め、当分止まる気配はない。

嬉しかった。

華琳が俺を受け入れてくれたことが。また共にいさせてくれることが。

おかえりと言ってくれたことが、何よりも嬉しかった。



## 陳留郡①

華琳に受け入れられたことで、改めて彼女の下に身を寄せることとなった俺は、最寄りの街に数日の滞在後、陳留への帰路に同行することとなった。元々華琳達が追っていた三人組の賊が隣にある豫州の沛国——つまり、現在は燈の治める領地へ逃げてしまったらしく、手出しが出来なくなってしまうのだ。そんな訳で、俺達は燈に宛てた手紙をしたためる以上にやれることはなく、それが済めば大人しく帰還する他なかった。

さて、陳留への到着までは順調に行っても数日は掛かるとのことだが、お互いに積もる話のある俺達にすれば逆に好都合であった。俺は天の国に帰ってからのことを。華琳達は俺がいなくなつたその後のことを。俺達はそれぞれを語り合い、離れていた間を埋めるようにながらゆつくりと進んだ。

そんな中で、俺は三人と香風に一つの質問をした。

何故皆は俺のことを覚えており、俺と一緒にいた時の記憶を持っているのか、と。

よくよく考えてみればおかしいことである。華琳の話からするに、今はまだ黄巾の乱も起きていないような時期、つまりは過去なのだ。今の華琳はあの時ほど大きな力を持つておらず、彼女と共に大陸を統べることとなった英雄達も表舞台には現れていない。孫策と孫権は袁術の客将として酷使されているらしく、劉備に至ってはまだ筵を作つて売つているような一村人なのだそうだ。

これが大陸を三国が統べているような時代ならば、理由はどうであれ、俺がいなくなった世界に戻つてこれたのだと素直に喜び、華琳達が俺を覚えていることになんの疑問も抱かなかつただろう。思い切つて尋ねてみた俺に華琳達は、そのことかと言わんばかりにこくこくと首を縦に振り、やがて全く同じ答えを教えてくれた。

曰く、夢を見たのだそうだ。

今から十日ほど前、普段と変わらない一日を過ごした華琳達は、しかしその夜にある夢を見た。自分達が知らない男と共に、この大陸を

続べるまでの道程だ。苦楽を共有し、想いを通じ合わせ、愛し合う関係になった彼女達だが、最後にはその男は消えてしまう。個人によって内容には差異があつたものの、大まかな流れについては同じだったらしい。

そして翌日、目を覚ますと思ひ出していた。

男、北郷一刀と自分達が歩んできた道のり。そしてその果てに作り上げた太平の世を。

「あの時は大変だったのよ。あなたがいないと春蘭は暴れるし、華命は大騒ぎするし、柳琳と栄華は大泣きするし。おかげでその日一日は全く仕事に手がつかなかったわ」

「か、華琳さま！ それを北郷に言わないでくださいー！」

「シヤンのところも、似たような感じ。でも星がいたから、なるべくこれまで通りにしてた」

香風の言葉に俺は確かにと納得する。子龍殿は旅の同行者だが、俺の知る限りではいずれ蜀の將軍となる人だ。勘も鋭そうだったし、下手に態度に出せば悟られて色々と聞かれかねなかつたのだろう。

「ははっ、嬉しいなあ……」

「何が嬉しいのだ、北郷？」

「皆がそこまで俺を想ってくれていたことが、かな。男冥利に尽きるっていうかき。本当に幸せ者だよ、俺は」

大切な人にここまで想われていたのだ、あまり自惚れるつもりはないが、それでも嬉しいものは嬉しい。ここに戻ってくることの出来た理由はまだ分からないが、これが神様の悪戯とでもいうのなら、俺はその神様に深く感謝したかった。

「残念だけど、陳留に帰ればやるべきことがまだまだあるわ。当分の間は多忙な日々が続くわよ、一刀。あまりのんびりしている暇はないものと思いなさい」

「任せてくれ。忙しいのは慣れているからな」

「ふふっ、なら期待させてもらうわ。あなたが天の国で培ったもの、見せてもらおうかしら」

華琳の言葉に俺は自然と口角が上がるのを感じる。期待されてい

るということに誇らしさと、下手なことは出来ないという緊張感。二つの思いに浮わついていた心に気合いを入れ直した。

それから数日後、道中で特にアクシデントが起こることはなく、俺達は無事に陳留に到着することとなる。



十年ぶりに見た陳留の街を囲む城壁は、相変わらず凄まじいまでの迫力を有していた。その迫力に圧倒され、暫しの間呆然としていた俺だったが、直後に響いた春蘭の「開門！」という勇ましい声にはつと我に返る。が、呆然としていた時の様子はばっちり見られていたらしく、隣にいる華琳と秋蘭が小さく笑っているのが見えた。少し恥ずかしい。

「城壁なんて大して珍しいものでもないでしょうに」

「一応十年ぶりだからなあ。それに、天の国にはこんな立派な城壁はなかったし」

苦笑しながらそんなことを話しているうちに、重厚な音を立てながらゆつくりと城門が開かれていく。そしてそこから飛び出し、一目散にこちらへ駆けてくる少女が一人。二つに結んだ金髪を揺らす彼女に、俺は思わずその真名を叫んだ。

「栄華！」

「北郷さあん!!」

馬から飛び降り、飛び込んできた栄華を優しく抱き止める。俺を見上げる彼女の目は赤くなってしまっており、目尻には涙が溜まっていた。

「あなたという人は……どうして勝手にいなくなってしまったのですか……！ 一体どれだけの人を悲しませたか、分かっているのですか……！」

「……ごめんな、栄華」

「いいえ、許しませんっ……！ 絶対に、許してなんてあげないんだからあ……！」

上擦り声で今にも泣きそうになりながら、栄華はより強く俺の体を抱き締めた。離れたくないという気持ちを行動で示す彼女に、掛けるべき言葉がなかなか見つからない。俺は自分の胸に顔を埋める栄華をただ慰めることしか出来ず、時折背中にぽんぽんと手を当てたり、頭を髪型が崩れない程度にそつと撫でた。

「栄華、俺はずつとここにいるよ。もう皆を悲しませたり、寂しい思いをさせたりなんてしない。勝手にいなくなりもしないから」

「北郷……さん……」

泣き止まない小さな子供をあやすように、俺はゆつくりと栄華に語り掛ける。

「俺はこの街が好きだ。そしてこの街に住む人達が大好きだ。俺はここにいたい、大好きな皆と一緒にいたいんだよ。だから……笑つてくれ。泣いてる栄華より、笑ってる栄華の方が俺は好きだから」

「……約束、ですわよ?」

「ああ、約束だ」

そうして見つめ合うこと数秒、やがて栄華はこくりと小さく頷くと、俺の体に回っていた腕を離れた。そして取り出したハンカチでそつと涙を拭い、今度は華琳の方へと向き直る。

「見苦しい姿をお見せして申し訳ありませんわ、お姉様」

「構わないわ。それより出迎えご苦労だったわね、栄華。私のいない間に何か起きたことはあるかしら?」

「いえ、お姉様の陳留は平穩そのものですわ。ただ、以前お姉様の仰っていた案件の書簡がいくつか届いていますので、また確認の方をお願いします。それと、お風呂の支度が出来ておりますので、今日は是非そちらで疲れを癒してくださいませ」

「いい手際ね。それではありがたく使わせてもらおうわ」

先程までの様子とは一変してすらすらと報告をする栄華に、華琳はふつと笑って満足そうな表情を見せ、春蘭と秋蘭達騎馬隊を連れて陳留の城門をくぐっていった。残されたのは俺と香風、そして栄華の三人だけだ。俺は自分の乗る馬の後ろを叩きながら、ポツンとその場に立ち尽くす栄華に声を掛ける。

「栄華、良かったら乗るか？」

「へ？ わ、わたくしが、北郷さんの後ろに？」

「おう。わざわざ出迎えに来てくれたのに、また歩かせるのは悪いしな。なんだったら交代の方がいいか？」

「いえ、いえ！ そ、それでは失礼しますわ！」

俺の提案にぱつと表情を綻ばせた栄華は、そのまま慣れた動きで馬に上った。金庫番としての文官的側面が目立つ栄華ではあるが、彼女もまた華琳を支える立派な將軍の一人だ。騎乗くらは朝飯前らしい。と、そこまで考えたところで、後ろから栄華がおずおずと寄り掛かってくる。

「えっと、北郷さん。わたくし、重くはありませんか……？」

「平気だよ。栄華一人くらい軽いもんさ」

「栄華さま、久しぶり」

「あら……あらあら、香風さん！ お久しぶりですわ！ お元気そうで何よりです」

最初は俺の背中にぴったりと引っ付き、おっかなびっくりしていた栄華だが、隣にやって来た香風に気付くとすぐに嬉しそうな声を上げた。そういえば栄華は香風や季衣、流琉といった子が好きだったなあと、俺は後ろから聞こえてくる楽しげな会話に、一人笑みをこぼした。「北郷さん、お姉さまを追い掛けなくて良いのですか？ 早く行かなくて、怒られても知りませんよ？」

「おっと、そうだった。栄華、それじゃあしつかり捕まってくれ。香風、行くぞ？」

「はい」

「よろしくお願いしますわね」

栄華のその言葉を合図に俺と香風は馬の尻を蹴り、すっかり先にまで行ってしまった華琳達を追い掛け始めた。

## 陳留郡②

大勢の人々で賑わいを見せる陳留の大通り。そこを馬に乗って進みながら、俺は十年前の記憶に思いを馳せた。

華琳の覇道も、俺の警備隊も、皆の夢も、全てはこの陳留から始まったのだ。俺にとってこの街は第二の故郷と言っても過言ではない。そんなこの陳留に再び戻ってくるのが出来たせいも、不意に胸の内から温かい何かが込み上げてくるのを感じた。

「懐かしいな……本当に……」

「ですが今の陳留には、まだまだ改善すべき点が山のようにありますわ。区画の整理、治安の向上、その他諸々……。正直、お金も人も全く足りていません」

「確かに。シャンの知ってる陳留と比べたら、ちよつと寂しい」

後ろの栄華がふうと息をつき、俺と同じくキョロキョロと辺りを見回していた香風がポツリと呟く。彼女の言う通り、俺の記憶にある陳留も今よりもっと綺麗で、かつ活気に満ちていたような気がする。とはいえ、時期としてはまだ黄巾の乱も起きていないような頃と、劉備孫策連合との決戦を間近に控えた頃とでは差があつて当然だ。仕方のないことだろう。

「だから言ったでしょう、当分の間は多忙な日々が続くと」

どこから聞いていたのか、少し前にいた華琳がそんなことを言つた。その意味をここにきてようやく完全に理解し、俺はこくりと頷く。

街の大通りを進んでいた俺達は、やがてどつしりと構えられた城へと到着した。沸き上がってくる帰ってきたのだという実感に、自然と頬が緩んでしまう。そして、そんな俺達を城の前で出迎えてくれたのは、これまた俺のよく知る女性だった。

「お帰りなさい、お姉様。そして……一刀さん」

「ええ。今戻ったわ、柳琳」

「ただいま、柳琳」

ペコリと下げていた頭を上げ、丁寧なお辞儀をする女性——柳琳。

全てを包み込むかのような優しい微笑みは、相変わらず健在のようだ。その隣に華命の姿はないが、自由奔放な彼女のことだ。きつとどこかで日向ぼっこでもしているに違いない。

「申し訳ありません。姉さんも一緒にと思っただのですが……その、見つかからなくて……」

「もう、華命さんだったら……。お姉様のお帰りだというのに、一体何をしているのかしら……」

なるほど、やはりだ。華命の気ままさは変わっていないらしい。

「そう……なら一刀、柳琳と一緒に華命を探してきなさい。私は湯を浴びてくるわ。後でこれからについての話をするつもりだから、将であるあの子を放っておく訳にはいかないわ」

「分かった。栄華、降りるぞ」

栄華に短く断りを入れてからさつと馬から降りる。そうして、城に入っていく華琳達の姿が完全に見えなくなるのを待ってから、俺はあらためて柳琳と向き合った。

「久しぶり、柳琳」

「はい。本当に……お久しぶりです」

そう言って柳琳は先程と同じ笑顔を見せる。が、俺には今の彼女がどこか取り繕っているように思えた。それは僅かに震える肩や潤んだ瞳を見れば一目瞭然で——俺は無意識のうちにそんな柳琳を抱き寄せていた。

「あ……」

「柳琳……」

もう一度会えて嬉しい、そんな気持ちを全身で示すように抱擁をする。ピッタリと体をくっ付けければ、とくん、とくんという柳琳の鼓動が聞こえてくるような気すらした。

「何も言わずにいなくなつて……ごめん」

「謝らないでください。こうして一刀さんは戻ってきてくれたんですから……私には、それだけで十分です」

「……ありがとう、柳琳」

「はい。……一刀さんは、暖かいですね」

言葉を重ねる度に、最初は強張っていた柳琳の体から、だんだんと余計な力が抜けていく。やがて彼女の方からも腕が回され、俺達は少しの間お互いの温もりを感じ合った。

▽△▽△

「ありがとうございます。もう大丈夫です」

「辛い時は力になるよ。辛い思いをさせてた俺が言うのもなんだけどさ」

「ふふっ、ではこれからは頼りにさせてもらいますね」

そう言っただけで柳琳はまるでつきものが落ちたようだ。俺のよく知る彼女に戻ってくれたことで、こちらもつられるように破顔した。

「さて、それじゃあ華命を探しに行こうか」

「はい。城の外に出ていったという報告は受けていませんから、きつとまだ城の中にいる筈です」

先行する柳琳の後に続き、俺も城へと入っていく。ここに足を踏み入れるのも十年ぶりだ。どの道かどこに通じているのかも曖昧になっただけで、迷わないようにしつかりついていかなくてはいけない。

「姉さーん！ どこにいるのー！」

「華命、俺だー！ 帰ってきたぞー！」

二人して華命の名前を呼びながら、彼女が日向ぼっこしているような場所をどんどん回っていく。こうして名前を呼べば向こうからも出てきてくれるし、何より一々屋根の上が上がって確認しては、いくらなんでも時間が足りない。あと、危険だ。

そうして華命を探し始め、そろそろ二刻もの時間が経とうとしていた。食堂、蔵、厩等々、彼女がいそうな場所は一通り行って見たが、未だに見つかる気配はない。ここまでくると、もしかすると華命を待たせているのではとも思えてくるので、俺と柳琳もやや焦り気味だ。

「うーん……華命の奴、どこ行っただけ？」



「もう大体の場所は見終わりましたが……もう、どこにいるのよ、姉さん」

小さく溜め息をついて項垂れる柳琳だが、彼女の言葉も尤もだ。こ  
うも見つからないと焦りもそうだが、心配になる気持ちも強くなつて  
くる。

もしかすると城の外に行ってしまったのかもしれない。

そんなことを考えた瞬間だった。

「お——い！」

「ん……う？」

「こっちっす——！こっち——！」

不意に響いた声に顔を上げ、発せられた方に目を向けると、少し離  
れたところにある屋根の上でブンブンと手を振っている人影が見え  
た。キラキラと光る金髪に見覚えのある青の衣装。俺と柳琳は同時  
に目を合わせるとすぐに頷き、そこに向かって走り出す。

「華命っ！」

「姉さんっ！」

「二刀っち！柳琳！」

その人影——華命は、駆け寄ってくる俺達を喜色満面で迎えた。持  
ち前の人懐っこい笑みを浮かべ、すつくとその場に立ち上がった彼女は  
勢いよく助走をつけ——跳んだ。

もう一度言おう、跳んだのだ。

建物の二階部分、すなわち地面から六、七メートルはあろう高さか  
ら。

「はあっ！」

「ぎゃああああああああ！」

予想だにしなかった華命の行動に俺の口から困惑の音が、そして柳  
琳からは絹を裂くような悲鳴が上がる。思わず足をもつれ、そのまま  
転んでしまいそうになるが、すぐさま体勢を立て直し、ギリギリのと  
ころで着地点に滑り込むことに成功した。

その直後、重力に引かれるがままに降ってきた華命を体で受け止  
め、俺は背中から地面に叩きつけられる。

「ぐえっ!？」

「一刀さんっ!？」

「ふえ!?! 一刀っち! しっかりしてほしいっすー!？」

あまりの衝撃に一瞬意識が飛びかけた。視界がチカチカと点滅し、近くにいる筈の華命と柳琳の声すら何故か遠く感じる。それでもなんとか生きてはいるようで、俺は弱々しく呻きながらも小さく手を上げ、自らの無事を彼女らに伝えた。

「もう姉さんっ! あんなところから飛び降りて、怪我でもしたらどうするの!？」

「あはは、もう柳琳は心配性っすねー。あたしがあれくらいで怪我する訳ないっすよ!？」

「着地の時に足を挫くことだっただけであり得たわ。姉さんがいくら凄いとあったって、絶対に何も起きないなんて言えないの。だから一刀さんもこうして姉さんを助けようとしたんじゃない。出来るとか大丈夫とか関係なく、あんな真似はもうしないで……」

だんだんと涙目になりながら懇願する柳琳。華命もこれには身にこたえたようで、申し訳なさそうに目を伏せ、ペコリと頭を下げた。「うっ……ご、ごめんなさいっす。一刀っちの姿が見えたから、それで……つい……。一刀っちも、本当にごめんっす」

「華命の気持ちも分かるし、気にしないでくれよ。華命に会いたかったのは俺も同じだからさ」

いてて、と小さくこぼしながら少々痛む体を起こし、あらためて華命と向き合った。不安げに揺れていた藍色の瞳を、すつと覗き込むように視線を合わせる。

「ただいま、華命。また会えて嬉しいよ。元気そうでよかった」

「……! お、おかえりなさいっす! あたしも! 一刀っちに会えて凄く、すつごく嬉しいっす!!」

感極まったのか、その一言と共にガバツと抱き付いてきた華命に押され、俺は再び地面に倒れる。

痛い。だがそれ以上に喜びが勝った。沸き上がってくる幸福感に思わず顔がにやける。

「ねえねえ一刀っち。一刀っちはもうずっとここにいるんすか？」  
「ああ。俺はここでまた皆と一緒に、華琳のために尽くすつもりだよ」  
「ホントっすか!？」 ならあたしと柳琳と一刀っちは、これからずっと一緒にいられるっすね！ 三人で買い物にも行きたいし、美味しいものも食べたいっす！ それからそれから——」

爛々とした目でこちらを見つめる華命は、俺が肯定したことで更に目を輝かせた。それから嬉々として自らの願望を語り始めた彼女を、俺と柳琳は微笑みと共に見守り続けた。

彼女の望みを必ず叶えよう、そんな誓いを胸に立てて。

## 陳留郡③

「ここにいたのか。北郷、華命、柳琳」

「遅いぞ。一体何をしている？」

後ろから掛けられた声に振り返ると、そこには秋蘭と春蘭の二人が立っていた。恐らく華琳と共にお風呂に入っていたのだろう、二人の白い肌は上気して微かに赤くなっており、身に付けている服も汚れ一つない綺麗なものに変わっている。よく見れば髪も完全に乾いている訳ではないようだ。

「あつ、春姉えと秋姉えっす！ おかえりなさいっすー！」

「ああ」

「うむ。さて北郷、華命も見つかったようだし、そろそろ華琳さまのもとに向かうぞ。あまり我が主を待たせるな」

「分かった」

春蘭と秋蘭がここにいるということは、華琳の方も既に支度は終わっている筈だ。秋蘭の言う通り、あまり待たせてはせつかくお風呂で良くなった機嫌を損ねかねない。華命を見つけるといいう目的が達成された今、速やかに参上するのが望ましいだろう。

「？ 柳琳、華琳姉えがどうかしたんすか？」

「それは歩きながら説明するわ。一刀さん、行きましよう」  
「だな」

柳琳の言葉に頷き、俺達は春蘭と秋蘭の後を追った。



「来たわね。それでは早速始めようかしら」

先行する春蘭と秋蘭に続いて謁見の間に行って来た俺達を確認してから、華琳はそう切り出した。その身から放たれる覇気がこの場を満たし、あまりの緊張感に俺はぐくりと唾を飲んだ。

「一刀と香風がこうして揃ったことだし、今後の我々の方針を説明しておくわ。まず第一に、私の目指すところは、この混乱した大陸に再

び平穩をもたらずことよ。中央の腐敗に伴い拡大する民の不満、それは最早到底抑えることの出来るものではないわ。この様子では近いうちに必ず破裂する。それが例え、天和達がいなくともね」

天和達がいなくとも争いが起こる、華琳はそう断言した。その理由が分からず首を傾げていると、隣の秋蘭がそつと耳打ちしてきた。

「太平要術の書があったらどう？ あれが華琳さまの元から盗まれていないのだよ」

「太平……ああ、なるほど。それでか」

天和達が図らずも黄巾の乱を起こしてしまった原因、それが太平要術の書だ。あれによって集められた彼女達のファンが暴走、そこに不満を抱えていたり、生活に困っていた民や賊が一斉に便乗し、結果としてこの漢の地を巻き込む大規模な反乱となってしまったのである。具体的な数は覚えていないが、恐らくは何十万という人々がいた筈だ。この時期の諸侯の持つ兵力が数千から数万程度だったことを考えると、その数が如何に膨大であるかがよく分かる。

「ん……あれ？ じゃあなんで秋蘭達はあそこに来たんだ？ 確か三人があそこに来たのって、太平要術の書を盗んだ賊を追い掛けてたからだよな？」

如何せん十年も前のことだ。初めて華琳と出逢った時のことは覚えていても、彼女が俺のいた荒野に来ていた理由については記憶が曖昧になっている。だが、確か俺の言った通りの理由だった筈だ。

「華琳さまの素早いご判断のおかげで書が盗まれることはなかった。だが、それ以外にいくつか盗まれたものがあるのだよ。あの時の我々はお前のことを思い出したばかりで、かなり慌ただしく動いていたからな。情けない話だが、賊の侵入を許してしまった」

肩を竦めながら秋蘭は小さく息をついた。太平要術の書のような特別な代物でないにせよ、華琳の所有物を賊に掠め取られたという事実は、彼女にとって許されざることのようなのだ。

「……でもさ、その太平要術の書が天和達に渡ってなくても、本当に争いが起きるっていうのか？」

「うむ。彼女達がいようがいまいが、民の不満が高まっていることに

変わりはない。華琳さまの仰られる通り、そう遠くないうちに国は乱れるだろう。かつてとはきつかけが違うだけでな……」

国が乱れる。争いが起こる。そうなれば、人が死ぬ。

当然の帰結である筈なのに、酷く胸が傷んだ。

「これから私達は大規模な乱に備えて動かなくてはならない。愛しき我が民を守るため、今の自分達が出来ることがを必要があるわ。全員、己が役目に全力を尽くすように！」

『はっ!!』

春蘭、秋蘭、華命、柳琳、栄華、香風、そして俺。この場に集った者達の声が木霊した。その気迫にビリビリと空気が震えるのを感じる。

「——それと、一刀」

「ん？ どうした？」

不意に名前を呼ばれて顔を上げた俺の視界に、にやりと笑う華琳が映った。なんとも嫌な予感がする……。

「あなたにはこれから少しの間、皆の補佐に回ってもらおうわ。十年も天の国にいたのなら、少しくらいこちらに慣れるための時間は必要でしょう？ それに私自身、今のあなたがどこまでやれるかも知りたいのよ」

なるほど、それは俺にとって願ってもないことだ。華琳の下で働く以上、自分に何が出来るのか、しっかりと把握しておかなくてはならない。

「それが終わればあなたにも一人の将としてきっちり働いてもらうつもりでいるから、覚えておきなさい」

「将として……本気か？」

直後に来た予想外の一言に軽く目を見開き、思わず聞き返してしまふ。だが、華琳は間違いのないと言わんばかりに頷いた。

「ええ。有能な人材を適当な仕事で腐らせはしないわ。ただでさえ今人手不足が深刻なのだから、使えそうな者は遠慮なく使おうよ」

それとも、と華琳は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「かつて出来ていたことが今は出来ないなんて、まさかそんな腑抜け

たことを言うつもりはないでしょうね？」

「む……」

その一言は、この上なく的確に俺のプライドを刺激した。むすつと頬を膨らませて不機嫌さを露にした俺を、華琳は何も言わずにただ見つめる。

今の自分は過去の未熟な己にも劣るのか？

十年もの時を無為に過ごしたのか？

お前は、口先だけの男なのか？

空のように澄んだ碧眼が俺にそう尋ねてくる。

そんなもの、答えは一つしかない。

「分かった、やるよ」

「ええ、それでこそ一刀よ。期待しているわ」

こうして俺はこれから少しの間、皆の補佐という形で様々な仕事を経験することになった。

## 陳留郡④

「あと五周だ！ 気を緩めるなよ！ 最後まで走り抜け！」  
『はっ!!』

訓練場に響き渡る春蘭の怒声に、ランニングをしている兵士達が威勢よく返事をする。既に十五周ほどしているにも関わらず、これだけの声が出せるとは凄まじい体力だ。流石は春蘭の率いる兵士達、根性のある先鋭揃いだというのは伊達ではないらしい。

そんな先鋭の中に、何故か春蘭の補佐である俺が混じっているのは、未だに訳が分からないのだが。

「北郷！ 声が聞こえんぞお！」

「そりゃあこれだけ人数がいれば俺の声なんて聞こえる訳ないだろう！  
ていうか名指しするな！」

「それは気合いが足らんだ！ もう五周させられたいのか！」  
「理不尽な!？」

あまりの言い分に俺は息切れしながらも声を張り上げる。正直、武器や鎧を身に付けた状態で長距離を走るのとはともしんどい。勿論、戦場においては今の状態が当たり前なので、甘えたことなど言ったられないのだが、それでも俺だけピンポイントで無茶苦茶言われるのは間違っている筈だ。

「よし、走り込みが終われば二人組を作れ！ 私が止めと言うまで組んだ相手と打ち合うのだ！」

『はっ!!』

「北郷、お前は私とだ！ さあ構えろ、戦場で待ったは通じんぞ！」

七星餓狼を抜刀し、ぜえぜえと息を整えていた俺のところに来た春蘭は、とてもいい笑顔でそう言った。きつと彼女の辞書に情けの文字はないのだろう。半ばやけくそになりながら剣を抜いた俺は、両手でそれを構えて春蘭に相對する。

「っ、せええええええええい！」

「はあああああ！」

訓練用に刃を潰した得物を春蘭目掛けて全力で振り下ろす。そこ



で相手が怪我をするかも、と躊躇いはしない。相手が曹武の大剣たる春蘭だからだ。こちらがどれだけ力を出したところで、向こうにこの剣が届く可能性はごくごく低い。俺と彼女との間には、それほどまでに圧倒的な実力差があるのだから。

そして案の定、俺の一撃は春蘭に呆気なく止められてしまう。

「軽い、あまりに軽い！　こんな程度では華琳さまをお守りすることは出来んぞー！」

「言ってくれ……なっ！」

警察学校での日々、そして卒業してからも行った剣道の練習を思い出しつつ、出せる力の限り春蘭に当たっていく。纏った鎧によって体は普段より遥かに重いが、その重さを剣の一撃一撃に込めて振るう。刃と刃がぶつかる度に甲高い金属音と火花が散った。

「ふっ、今のは悪くなかったな。だが、これはどうかな！」

「うわっ!？」

ギリリと春蘭と瞳が光った瞬間、俺の目と鼻の先を大剣が横切った。全身から血の気が引き、思わずその場にへたり込みそうになってしまう。

捉えられない。

春蘭の剣が速すぎるのだ。

「ここが戦場なら貴様は今ので死んでいる。いや、それ以前にも少なくとも五回は私に斬られているぞ」

「ははっ……全くもってその通りだな……」

声が震え、乾いた笑いしか出てこない。情けないことに今の俺は春蘭の鬨気に当てられ、既に参ってしまった。かけていた。

「むう……そんな捨てられた犬のような顔をするな。確かに華琳さまをお守りし、将として軍を率いるつもりなら、北郷の武はまだまだと言わざるを得ん。精々、百人隊長といったところだろう」

だが、と春蘭は言葉を区切る。

「今の貴様は以前に比べればずっと強くなっているぞ。それはこの夏侯元讓が保証してやる。歴然の強者ならいざ知らず、凡百の武将相手なら勝つことは出来ずとも、そう簡単に負けはせん筈だ」

「……ああ。ありがとな、春蘭」

慣れない励ましの言葉だったのだろう、顔をやや赤くしてこちらから目を逸らす春蘭に、少しだけ気持ちが悪くなった気がした。

俺は弱い。ならば、強くならなくてはならない。

生きるためにも、誰かを守るためにも。

例え強くなれなくとも、強くなるための努力を怠っては駄目だ。

「春蘭、もう一度頼む」

「うむ、さあ来い！」

再び剣を構える頃には、既に体の震えは止まっていた。真つ直ぐ正面から春蘭を見据えた俺は、勢いよく地面を蹴って突撃を敢行した。



午前中の組み手では散々に打ち負かされた俺であったが、午後からの訓練では兵達に混じらず、彼等が春蘭の指示で行動する様子をつぶさに観察していた。数にしておよそ千人もの兵がまるで春蘭の手足のように動く様は、ただただ圧巻の一言に尽きる。素早く陣形を敷き、高い士気を長時間維持し続ける夏侯惇隊は、恐らく現在の漢において最も強く、勇敢な軍であるに違いない。

「今日の訓練はここまでする！ 次回に備えてしつかりと体を休ませておけ！ 以上！ 解散！」

夕陽も沈み始め、綺麗な茜色に染まる空の下、春蘭の号令を最後に訓練は終了した。そろそろと去っていく兵達の背中を見送り、やがて全員がいなくなるところで、俺はふうと大きく息をついた。その途端に全身を疲労感が襲ってくる。

「どうした。くたびれたのか？」

「うん……。正直、だいぶ疲れちゃったよ……」

「全く、この程度で情けない。天の国でもけいさつ……かん？ とやらをやっていたのだろう？ このくらいで音を上げては先が思いやられるぞ」

「はははっ……その通りだな」

春蘭の言う通りだ。以前、華琳に言われた将になるという話が実現すれば、俺も春蘭や秋蘭のように兵を束ね、指揮を執らなくてはならない。そうなった時、彼女達のようにとはいかずとも、ある程度のことが出来なければ、その役割を全うすることは不可能である。

「春蘭」

「ん、なんだ？」

「俺、頑張るよ」

「うむ、そうしておけ。華琳さまのお役に立つ上で、優秀すぎて困るということはないだろうからな。精々励めよ、一刀」

にやりと不敵な笑みを浮かべた春蘭に、つられるように俺も笑った。

今日の訓練で、自分の力がまだまだであることをあらためて思い知らされた。がむしやらにもがき、警察官として生活していた日々は無駄ではなかったものの、それだけでは足りないということがはつきりと分かったのだ。

きつと華琳はまた戦乱の世に身を投じるだろう。この国の平和と民のために、険しい棘の道を進む筈だ。そんな彼女のためにも、そして誰かを守るためにも、俺はもつともつと精進しなければならない。

「……やってやるさ」

沈み行く夕陽に手を伸ばし、小さな誓いを胸に立てた。

## 陳留郡⑤

ブンと振り下ろされた剣が空を切る。

まだ太陽も顔を出してすらいない明け方、まだ白みがかつた空の下で、俺は兵卒の扱うような剣を使って素振りをしていた。一回一回きちんと確かめるように中段に構え、ふつと息を吐きながら全力で振り下ろす。竹刀よりも遥かに重い得物は、同じ素振りでも掛かる負担がずっと大きい。まだそこまで続けていないにも関わらず、両腕の筋肉は既に悲鳴を上げ始めていた。

「ふう……せいっー」

しかし、だからといって止まる訳にはいかない。地道な繰り返し結果に結びつくことは、三十年近く生きてきた中で身に染みて理解している。これを問題なく振り続けられるようになって、初めて前に進むことが出来るのだ。

「（とはいえ……あんまり無理したら今日の仕事に差し支えるかな）」

自主訓練をやりすぎて本来の仕事が出来ませんでした、などと華琳に言おうものなら、一瞬で首と胸が泣き別れすることだろう。その辺りの見極めもしておいた方が賢明かもしれない。

「朝から精が出るな、一刀」

「あれ、秋蘭?」

不意に後ろから掛けられた声に振り向けば、いつもの青い装束を纏った秋蘭が立っていた。珍しくその隣に華琳や春蘭の姿はない。どうやら彼女一人だけのようだ。

「おはよう。どうしたんだ、こんな時間帯に? まだ随分と早いぞ?」  
「今日の朝議で報告すべきことをまとめていた。それも先程終わったから、気晴らしに少し散歩していたのだよ。それにしても、一刀が朝からこんなことをしていたとはな」

そう言って持ち前であるクールな微笑を浮かべる秋蘭。別に誰かに見られたくない秘密の特訓という訳ではないが、しかしこうして見られては少し恥ずかしくもある。

「……続けいいのか？」

「え？ あ、ああ、そうだな。……すう……ふう……」

胸に手をやって深呼吸をし、気分を元の状態に戻す。そうしてから、俺はもう一度素振りを再開した。

「ふっ……はっ！ ふっ……はっ！」

「……」

荒い呼吸音と風切り音だけが静かに中庭に響いては消えていく。俺が剣を振り続けている間も、秋蘭はただ無言でその様子を見ているだけだ。口を挟むことなく、腕を組んでこちらの動き一つ一つを観察している。

「あの、見てて楽しいか？」

「ああ、楽しいぞ。お前が真剣な顔をして取り組んでいるのだ、こうして見ているだけで……胸の奥が暖かくなってくるような気がするよ」「そ、そっか……」

つい気になって尋ねてみたところ、予想以上に鋭いパンチが返ってきた。今の俺はきつと耳の先まで赤くなっていることだろう。これではいけない、もつと集中しなくては。

それからどのくらいの時間が経っただろうか。腕に蓄積した疲労がそろそろ限界というところで、俺はゆっくりと剣を下ろした。それと同時に、全身を適度な疲れと怠さが襲ってくる。

「秋蘭、そこにある桶を——」

「これか？」

「そう、それそれ。ありがとな」

言い切る前に差し出された水桶をありがたく受け取り、底に沈めていた布で汗を拭う。上気した肌が冷たい水によって冷やされ、とても気持ちいい。出来ることなら上着も脱いでしまいたいが……秋蘭の手前だ、あまり見苦しい姿は見せられない。

「ふむ……」刀、私で良ければ背中を拭こうか？」

「……え？ いいのか？」

「ああ。ほら、早く上着を脱ぐといい」

そう言って秋蘭は俺の手から布を取り上げると桶の水に付け直し、

たつぷりと水を吸ったそれをぎゅつと絞る。一方の俺は秋蘭の言ったことがまだ飲み込めず、その場に立ち尽くしたまま、そんな彼女の様子をぼんやりと眺めていた。

「どうした？　今更肌を見せることを恥ずかしがるような関係でもあるまい。それとも……余計なお世話だったか？」

「えっと、なんていうか……まさか秋蘭がそんなことを言うなんて思わなかったからさ。別に嫌とか、そういうのじゃないんだ」

嫌な訳がない、むしろ大歓迎だ。大切な人が厚意で言ってきた提案をどうして断れようか。

俺は上着を脱いで畳むと、その背中を秋蘭に向けてどつと座る。それから一拍ほど空いて、先程肌を撫でていた時のひんやりとした感覚が背中に走った。ベタベタとして気持ちの悪かった汗が、秋蘭によって丁寧に拭き取られていく。これはちよつとした極楽気分だ。

「ふう〜……気持ちいいよ……。ありがとな、秋蘭……」

「ふふつ、そうか。一刀がそう言ってくれるなら、私もお節介を申し出た甲斐があるというものだ」

ちよつとした会話をしながら束の間の休息を楽しむ。が、十数秒もしないうちに秋蘭の動きはだんだんと小さくなっていき、やがてピタリと完全に止まってしまった。

「……秋蘭？」

「……かつて華琳さまが仰ったのだ。お前が天に還ってしまった理由は、本来の歴史から大きく乖離してしまったからだ」と

小さくこぼれた秋蘭の声は、まるで懺悔をしているかのように聞こえた。震えていて、今にも泣き出してしまいそうな雰囲気。こんな秋蘭は初めてで、俺は何も言えずに沈黙を貫いた。

「……私のせい、なのか？」

その言葉で、気付く。

気付いてしまう。

俺がいなくなってから秋蘭が背負い続けていた、とてつもなく大きなその正体に。

「あの時、定軍山で私と流琉が死んでいれば、一刀が消えることはな

かったのではないか？ お前の知る歴史の通りに私が死んでいれば、華琳さまに辛い思いをさせることもなく、姉者が悲しむこともなかった——」

「秋蘭っ！」

駄目だ、絶対に駄目だ。

それは、それだけは言っちゃいけないことだ。

自分が死ねば良かったなんて、そんなのは間違っている。

「仮に二人が定軍山で討たれることで俺がこの国に残れたとしても、秋蘭と流琉がいなくなった世界で心の底から幸せになれる訳がないだろう！ 俺だけじゃない、華琳も、春蘭も、季衣も、皆だってそうなんだ！ 秋蘭と流琉が死ねば残された皆が悲しむって、そんなの考えなくても分かるさ！」

振り返り、秋蘭の肩を掴んだ。大きく揺らぐ橙色の瞳を、俺は真っ正面から覗き込む。

秋蘭と流琉は俺にとって——否、曹魏にとって欠けてはならない大切な人だ。それは一人の将としてという意味だけではない。秋蘭は公私において華琳を支えてくれていたし、流琉の料理は誰をも笑顔にしてくれた。

そんな二人だからこそ、華琳に禁止されていた天の知識を使っても、助けたいと思ったのだ。

「俺はな、秋蘭と流琉に死んでほしくなかった。例え自分が消えることになっても、二人には生きてほしかったんだよ！ 俺のことはいくらだって責めてくれていい。だから、頼むから……『自分が死ねば良かった』なんて言わないでくれ……！」

「……すまない」

——いや、違うな。

秋蘭はそう言い直した。はらりはらりと、その目から涙を流して。「ありがとう、一刀。私と流琉を救ってくれたことに、今一度礼を言わせてほしい」

ペコリと頭を下げ、秋蘭はふつと微笑んだ。その時の彼女の表情からは、先程までであった憂いの感情は影一つなく消え去っていた。

## ある夜のこと

華琳から渡された現在の陳留における警備隊の諸々について記された紙の束。それらに一旦目を通した俺は、ふうと息をつきながら背凭れにゆつくりと寄り掛かる。

あまりよろしくない、というのが正直な感想だった。

目下の問題として街の広さに対する警備隊の詰所の数が少なすぎる。これでは犯罪や喧嘩などの問題が起きてても、場所によっては警備隊が間に合わないこともあるだろうし、騒ぎが連続で起きた際にはカバー出来ない部分も出てきてしまう。せつかくの警備隊もそうやってしまえば意味がない。

では詰所の数を増やし、働く人材も増やせばいいのではないかと言われると、そういう訳にもいかないのが現状だ。詰所を建てるのにも、人を雇うのにも、装備を整えるにも、何をするにしてもまとまった額の金が必要になる。残念ながら今の陳留の懐は暖かくない。金庫番の栄華に頭を下げたところで芳しい成果が得られる可能性は低いだらう。

「とりあえず警邏の頻度を増やして、あと犯罪者はしつかり捕まえて処罰するつてところかな。これが後々の犯罪への抑止力になつてくれるといいんだけど……」

小さくぼやきながら筆を手に取り、すらすらと報告書を書いていく。とはいえ、華琳からの書類だけでは分からない問題点もある筈だ、俺も警備隊の一員として実際に働いてみた方がいいかもしれない。現場の様子を一番知っているのは同じく現場の人間なのだから。

それにしても、やはり現代とここでは勝手が全然違う。携帯電話もパトカーもないこの世界では、知らせを届けてくれるのも現場に向かうのも全て人力に頼らざるを得ない。加えてまだ治安が良くないせいか、警備隊の駆り出される回数もここ最近は多くなってきている。なんらかの手を打たなくては流石にまずいだらう。この陳留は華琳のお膝元、街の人々が安心して暮らせる場所ではなくてはならないのだから。



「とりあえず今は出来ることから、か……」

それから俺は夕食などで途中休憩を挟みながら作業を進める。警備隊や陳留の治安に関すること以外にも、現在華琳の有する兵力や糧食、部隊の状況など、将軍という大役を任せられる上で知っておくべきことを頭に叩き込む。付け焼き刃かもしれないが、全く何も知らないでいるよりはいい筈だ。

「兵法は……桂花が来たら聞いてみようかな。いやでも、基礎くらいは自分でやつとかないと話にならないか……」

——頭の中では女を犯すことしか考えていない救いようのない変態のアンタなんかには、一から兵法のなんたるかを教えていられるほど、この天才苟噫さまは暇じゃないのよ！　せめて基礎くらいは自分でやって、何が聞きたいのかをしっかりと決めてから出直しなさい！　今のままの俺が教えを乞うたところで、こんな具合に追い返されるのが関の山だろう。これからは書庫に通う日々になりそうだ。

……それにしても、桂花を思い出すと恋しくなってくるのがあの毒舌だ。別に彼女に罵られたいとかそういう特殊性癖を持ち合わせている訳ではないが、あれがないと締まらないというか、少し寂しく思えてしまうのも事実である。

——桂花が来たら少し厄介がられるくらいにちよっかいを掛けよう。

俺はそう誓った。他の誰かが聞けばきつと呆れることだろう。

「二刀、いるかしら」

コンコンと控えめなノックと共に響く凜とした声。どうぞと許可をすると姿を現したのは案の定、華琳だ。

「やはりまだ起きていたのね。早く寝なさい、もう遅いわよ?」

「そっか。もうそんな時間なのか……」

どうやら仕事に没頭するあまり、時間の経過を忘れてしまっていたようらしい。当たり前だがこの世界に時計なんてものはないので、意識していないと時間が経つのは本当にすぐだ。机に向かっていた体をぐっと伸ばせばポキポキと背骨が鳴る音がした。

「うん、じゃあそろそろ寝るよ。気を遣わせてごめん」

「別にあなたを心配した訳じゃないわ。それより早くしなさい」

そう言つて華琳は俺の隣を横切ると寝台の方へ行き、そこにすくと腰を掛けた。

「……もしかしてここで寝るつもりなの？」

「ええ。何か問題でもあるかしら？」

「事前に言つておいてくれると良かったかな……」

「それではつまらないじゃない」

ですよね、と俺は苦笑し、机の上に広げていた道具一式の片付けに入る。我らが霸王さまの無茶振りに応えるのも臣下の務めだ。この程度のものならお安いご用である。

「入るよ、華琳」

「さつさとなさい」

そそくさと寝具に着替え、一人用の寝台に華琳と一緒に横たわる。落ちてしまわないよう身を寄せた華琳の体は驚くほどに細く、しなやかで柔らかい。この世界にはシャンプーもリンスもトリートメントも存在しない筈なのに、作り物のように美しい金髪からは仄かに甘い香りがした。

「ふふっ」

「どうしたんだ？」

「いいえ。ただ、今宵はよく眠れそうと思っただけよ」

「ああ……俺もだよ」

触れ合った素肌から伝わってくる華琳の優しい体温に、俺の意識は既に微睡んでいる。もう一つあるとすれば……それはきつと安心感だろう。愛しい人がすぐ傍にいてという、そんな安心感だ。

華琳もこの気持ちを抱いてくれていたなら、これほど嬉しいことはない

「今みたいな時間が……ずっと続けばいいのに……」

「寝言は寝てから言いなさいな。あなたも分かっているでしょう、もう時間がないということくらい」

「厳しいなあ華琳は……。まあ、確かにそうなんだけどさ」

以前、この陳留以外の土地について調べてみる機会があったのだ

が、それはもう酷いものだった。多くの太守や県令といった役人は高い税率を定めて民から多くの税金を搾取しており、それを自らの贅沢や中央への賄賂としてしか使っていないのだ。民の暮らしは過酷さを増すばかりで逃げ出す者すらいる始末。役人や国に対する不満は今この瞬間にでもどんどん蓄積していつている。最早、その膨れ上がった怒りはいつ破裂してもおかしくない。

「争いが起きる、か……」

「……不安なのかしら？」

俺を見上げる華琳の碧眼がすつと細められる。思うところがあるならここで言っておけ、そんな風に言っているような気がした。

「……いつか俺も誰かの命を奪うことになるのかなって……そんなことを考えてたんだ。前に華琳が俺に将になつてもらうって言つてたからさ、やつぱり覚悟くらいは決めておかないとなつて」

「二刀……」

誰も傷つけずにこれから始まる乱世を歩んでいけるだなんて思つてない。どれだけ望まなくとも戦は起きてしまうし、そうなれば戦死する者だつて出てしまう。今はまだ綺麗なこの手も、いつの日かきつと血で汚すことになるだろう。

だからこそその覚悟だ。

例えば誰かの命を奪うことになつたとしても振り返らず、心の中にそつとしまつて前へ進む。罪の意識に苛まれ、迷い苦しみ、時には傷つき地を這いずることになろうとも、俺は自分の信じた道を行くのだという覚悟を決めなければならぬ。

それがきつと戦場に立つ者が背負うべき責任なのだろうから。

「本当は怖いよ。どんな理由があるにしたつてやることは……その、人殺しだから。出来ることなら誰も傷つけないし殺したくないっていうのが本音なんだ」

でも、と俺は言葉を区切る。そして、華琳をそつと抱き寄せた。

「俺は華琳を支えるつて決めたから。この大陸を平和にしたいつていう華琳の隣に立ちたいつて思ったから。戦わなくちゃいけない時が来たなら……戦うよ、俺も」

「……それが、あなたの答えという訳ね」

その返事に俺は頷く。自分の意志で、確固たる信念のもとに。

「ならばそれが口先だけではないということを目撃させてもらおうかしら？ この曹孟徳の前で口にしたのだから、もう覆させはしないわよ」

「おう。期待に応えられるよう頑張るよ」

「……一刀、もしあなたが誰かを殺めることになったとしても、あなたが私達の愛する北郷一刀であることに変わりはないわ。それを忘れないで」

そう言っつて華琳は俺の唇にキスを落とすとそのままふつと優しく微笑んだ。込み上げてくる温かい気持ちに、華琳を抱き止める腕に少しだけ力が入る。

——俺が俺であることに変わりはない、か。

この先に何があるとも、どんなに辛い思いをしようとも、その一言があれば自分を見失うことはなさそうだ。

「ありがとう……華琳」

落ちていく意識の中で、俺は最後に愛しい人へ感謝を紡いだ。



あああああ!!」

絶叫しながらじたばたと手足をばたつかせて本気で逃げようとする桂花。しかしいくら俺がへっぴごでも、文官で非力な彼女を捕まえるくらいはとうとうということもない。

抱き締めた桂花の体は相変わらず細かった。ちゃんと食事を摂っているのかと心配になるくらい細かった。起伏に乏しい、なんて言ったら暁には後で何をされるか分かったものではないから黙っておくが、しかしそれでも女の子らしく、柔らかくて温かくていい匂いもするのだ。俺は腕の中の桂花をくるりと反転させて向き合おうと、そのまま頬擦りを敢行しようと顔を寄せ——見事に彼女の拳が頬に突き刺さることとなった。

「ふげっ!?!」

ラッキーパンチかそれとも狙ったのか、なににせよ桂花の拳を受けた俺はまるで蛙のような声を上げて倒れ込む。痛い、が、こんなものは春蘭との稽古に比べれば大した痛みではない。そうして顔を上げて立ち上がろうとした俺だが、目の前でわなわなと震えながら怒りを隠そうともしない桂花に、つうつと一筋の汗が流れるのを感じた。

「よ、よお桂花……ひ、久しぶり……」

「あんたは……あんたって男は——!!」

「ちよっ!?! 待っ、いたっ! 痛い痛い!?!」

「うるさいうるさいうるさい!! この変態っ! 色欲魔っ! 全身精液男っ!」

罵倒と共に飛んでくる足に蹴られ、踏まれる。これはなかなか馬鹿に出来ない痛さだ。おまけに今の桂花は怒り心頭といった様子でこちらの声は届きそうにもなく、彼女が落ち着くまでは耐えるしかない。

「勝手にいなくなっ! 散々迷惑を掛けておいて! 今更どの面下げて帰ってきたのよ!?! あんたが消えたことで私達がどれだけ大変だったか、その煩惱みれの頭に嫌っていうほど叩き込んでやろうかしら!?!」

「桂花、落ち着けっ!?! ごめん! 悪かった! 俺が悪かったから顔

はやめて!？」

そんなやり取りを繰り返すこと数分、騒ぎを聞きつけて俺達のもとにやって来たのは柳琳だった。彼女はまず初めに桂花を見て嬉しそうな顔を見せ、続いて文字通り踏んだり蹴ったりされている俺に血相を変えて駆け寄ってくる。

「け、桂花さん!? 一体一刀さんに何を!？」

「こいつが自分のしたこと重大さが分かってないようだから、こうやって教えてやってるのよ! 邪魔しないで頂戴!」

「で、でも流石にこれ以上はやりすぎだと思うわ。一回落ち着きましよう。ね?」

ああ……流石は柳琳、曹魏の良心だ。その優しさが身に沁みる。俺は全身を叩いて砂や埃を落として立ち上がり、柳琳にお礼を言おうとして――、

「何を騒いでいるのかと思えばあなただったのね、桂花」

ピタリと。まるで時が止まったかのように、この場に居合わせた全員が先程の声が出た方を向いて動きを止めた。そんなことが出来る人間なんて陳留に――否、この大陸に一人しかいない。

「か、か、華琳さまあゝ!!」

堂々とした足取りで、全身に圧倒的な覇気を纏わせて近付いてくる華琳に、桂花は感極まってその名前を叫んだ。その態度は先程まで俺に向けていたものとは全くの正反対で、相変わらずだなあと思わず苦笑がこぼれる。

「また会えて嬉しいわ。愛しき我が子房……ふふっ」

「ああ……勿体なきお言葉です……華琳さまあ……」

華琳にそつと頭を撫でられると甘い声を上げる桂花は、フードも相まって本当に猫のようだ。そんなことを思いながら甘い空気から目を外すと、隣にいた柳琳とぼつちり目が合った。どうやら彼女も同じことを考えていたらしく、それがおかしくて俺達は小さく笑った。

「桂花、ここに来たということは最早聞くまでもないとは思うけれど、今一度私についてきてもらえるかしら? 来るべき乱世を乗り越え、この曹孟徳が飛躍するためにはあなたが必要なの」

「勿論ですっ！ 非才で矮小なこの身ではありますが誠心誠意、血の一滴に至るまで華琳さまに尽くします！ ですから是非、この荀文若を華琳さまの覇道を支える者として、その末席を汚すことをお許しくださいっ！」

そう言つて桂花は華琳に向かつて頭を垂れた。見ているこちらが惚れ惚れするほどの臣下の礼である。

それを受けた華琳は……予想通り、不敵な笑みと共に満足そうに頷いた。

「あなたの想い、しかと受け取ったわ。これから頼りにさせてもらうわよ、桂花？」

「御意！」

主従の契りはここに結ばれた。

王佐の才と呼ばれし荀文若——桂花がこの曹魏に再び加わった瞬間だった。

「桂花さん、これからまたよろしくお願いしますね」

「ええ。よろしく柳琳」

「よろしくな桂花。俺も会えて嬉しいよ」

「私は全然嬉しくないわよ」

うん、いつそ清々しさすら感じるこの対応の変わり具合である。まあ、桂花らしいと言われれば桂花らしいのだが。なんにしても、彼女とこうしてまた一緒に過ごすことが出来るのであれば、俺としてはもう何も言うことはなかった。

「何を笑ってるのよ、気持ち悪いわね」

「ははっ、別になんでもないよ」

「……馬鹿」



## 来訪の報せ

「北郷さま、いらつしやいますか?」

自室で柳琳から預かった竹簡に目を通して見ると、不意に部屋の外から自分の名を呼ぶ声が聞こえた。一体誰だと首を傾げながらも「どうぞ」と一声を掛けると、一人の女性が恭しい態度で以て部屋に入ってきた。

「曹操さまがお呼びです。至急、謁見の間までお向かいください」

「華琳が……? 分かりました、ありがとうございます」

札を告げると女性は頭を下げ、入ってきた時と同じようにして部屋を後にしていった。それを見送ってから、俺もすぐに身嗜みを整えて謁見の間へ向かう。万が一にも遅れてはいけないため、やや早足だ。

「あ、お兄ちゃん」

「ん、香風」

その途中、曲がり角で偶然にも香風と出会でくわした。聞けば彼女も侍女の人に謁見の間に来るよう言われたらしい。そんな訳で、そのまま二人で一緒に行くことになった。

そういえば、香風は華琳が俺達を呼び出した理由を知っているのだろうか。俺達でなく香風まで声が掛かったということは、恐らく他の面子も同じと見ていいだろう。気なつた俺は足を止めずに隣の眠そうな香風に尋ねてみる。

「香風は何か聞いてないか? 華琳が俺達を呼び出したことについて」

「うんん……。シャンもご飯を食べて城に帰ってきたばかりだから、全然」

「そっか……」

残念ながら香風もこのことについては何も知らないようだ。主要な臣を集めるくらいなのだから、重要なことに間違いはない筈だが。と、そんなことを考えながら歩くこと数分、俺達は何事もなく謁見の間に到着した。

「あら、あなた達が最初に来るなんて意外ね。春蘭あたりだとばかり

思っていたのに」

到着した俺達に、玉座に座っていた華琳は楽しげに微笑んだ。その傍には既に我らが猫耳軍師、桂花が控えている。

「華琳、一体どうし——」

「慌てずとも皆が揃えば話すわ。少し待っていなさい」

一体どうしたんだ、と尋ねようとした矢先に言葉を遮られ、俺は大人数く皆が集まるのを待つことにした。初めに来たのはやはりいうべきか、春蘭だ。彼女は俺に遅れを取ったと気付くや否や、声を大にして悔しがり、続いてやって来た秋蘭に慰められている。秋蘭は秋蘭でぐずる春蘭を頭を撫でつつ、「ふふ、姉者は可愛いなあ……」と満足そうにしていた。なんとというか、平常運転である。

「申し訳ありません、ただいま参上しましたわ」

「ほら姉さん、着いたわよ。しつかりして？」

「ふあ〜……ご飯食べた後は眠いつすよ……」

やがて最後に現れたのは華命、柳琳、栄華の三人だった。柳琳と栄華の少し疲れた様子を見るに、華命を引張ってくるのに苦労したのだろう。華琳もそれは見てとれたようで、特に何も言うことなく三人が並ぶのを見送っていた。そして、整列した俺達を軽く一瞥してから、彼女はゆっくりとその口を開いた。

「つい先程、燈からの手紙が届いたわ。桂花」

「御意」

華琳の声に短く応え、どこからか一つの書簡を取り出した桂花は、そこに書き記されていた内容を淀みなく読み上げ始めた。

堅苦しい挨拶や難しい説明を省略すれば、『ごちらの都合がつきそうなので、近々そちらへ伺わせてもらう』というものだ。沛国の相という高い地位にある彼女が自らこの陳留へ出向く理由があるとすれば、恐らくは俺が戻ってきた時に出会った三人組の賊のことだろう。☒州の賊が州境を越えて豫州の沛国に入ったともなれば、その沛国を治める燈が出てきても不思議ではない。

「——かつての臣でも今の燈は沛国の相。そんな人物を迎えるともなれば相応の支度が必要よ。全員、心して準備に取り掛かりなさい。あ

まり悠長にしている暇もない上、一片の粗相も許されないわ」

『はっ!!』

皆の力強い返事が謁見の間に響く。かつての戦友とはいえ隣国のお偉いさんがやって来るのだ。小さな失敗であっても、それは華琳の顔に泥を塗るにも等しいのだから、この緊張感も当然と言えよう。

「柳琳、少々付き合ってもらえますか？ 至急、用意しなければならぬいものがありますので」

「勿論だよ、栄華ちゃん」

「秋蘭、現状で動かせる兵はどのくらい？ 警備の配置の参考にするから聞かせてほしいわ」

「そうだな……今使える人数となると——」

謁見の間から解散するとほとんど同時に、早速来るべき日に備えて話し合いを始めた栄華と柳琳、そして桂花と秋蘭。対してまだ動きを見せていないのが俺と香風、そして春蘭と華侖だ。語るまでもなく武力寄りのメンバーである。

「お兄ちゃん、どうするの?」

袖を軽く引かれて視線を落とすと、香風がじつと俺の目を見つめていた。そんな彼女に「どうしようかなあ……」とこぼした俺は、自分に出来そうなことを脳内で順に挙げていき——、

「……うん、やっぱり警邏かな」

「? 警邏?」

「そう。こういう時って何か普段しないような特別なことをしなくちゃって気になるけど、俺ってそういうの空回りして全然出来ないから。いつもしてることで、一番俺らしい仕事って言われたら、やっぱり警邏なんだ」

「そうだ、何も気負うことはない。燈と喜雨の二人が来るからといって、変に力んで格好をつける必要はないのだ。俺は俺に出来ることを精一杯する、それでいいではないか。」

「それにさ、街の治安が悪いと燈と喜雨に笑われちゃうだろ? それ  
は流石に嫌だしな」

「うん。じゃあシャンも、お兄ちゃんを手伝う」

「面白そうなことを話しているではないか、北郷。私も混ぜろ」

「あたしも手伝うつすよ！　こういうのは皆で協力した方が絶対い  
いっすー！」

春蘭と華命のありがたい申し出に頬が緩むのを感じる。体の底か  
らやる気がどんどんと溢れてきて、俺は「よしっ！」と拳を天へ突き  
上げた。

「それじゃあ、皆で頑張ろう!!」

「「おー!!」」

それから俺達四人は現陳留警備隊と協力し、きびきびと不正を働く  
輩を取り締まった。俺以外の三人は訓練や他の仕事のため来れな  
い日もあったが、暇を見つけては街を歩いて目を光らせており、何度  
も助けられることとなった。そんな三人に負けていられないと、俺自  
身も今まで以上に真剣に取り組んだ。

朝起きてから警備隊と街を練り歩き、夜は飯屋で皆をねまひ労つてから  
床に就く。日によつて差異はあれど、おおよそ似たような日々を十日  
程度繰り返し――、

いよいよ、その日を迎えることとなった。